

長野県植物研究者伝 3

河野 齡 蔵 抄 伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Mr. R. Kôno

長野県出身の植物研究者として、田中芳男・斎田功太郎につぐ方としてあげなければならないのは、河野 齡 蔵（1865～1939）である。

その履歴の概要は、次の通りである。

1865（慶応元年）現在の松本市島内の犬飼新田の旧家河野通重の4男として生れ、明治16年島内の河野久吉の養子となる。

1883（明治16年）18才、4月長野県より小学校中等科教員免許状を受領。6月東筑摩郡平瀬学校訓導。翌年6月まで勤務。

1885（明治18年）20才、長野県等常師範学校に入學。明治22年同校を卒業。

1889（明治22年）24才、上水内郡上水内高等小学校訓導。

1890（明治23年）25才、北安曇郡北安曇高等小学校訓導。

1892（明治25年）27才、東筑摩郡松本尋常高等小学校訓導。

1893（明治26年）28才、矢沢米三郎と乗鞍岳に登る。

1894（明治27年）29才、爺ヶ岳に登り、また矢沢米三郎と再び乗鞍岳に登る。

1896（明治29年）31才、文部省植物科教員検定試験に合格。後、動物科・生理衛生科・図画科にも合格。

1897（明治30年）32才、長野県尋常師範学校助教諭の辞令を受けとる。しかし、これは教員養成の仕事のためであると思われる。同じ月に北安曇郡大町尋常高等小学校長となり、勤務地は大町で、翌年小学校教員第二種北安曇郡講習所教員を兼任している。

1899（明治32年）34才、8月15日岡田邦松らとともに白馬岳に登り、杓子岳、鏈ヶ岳より岳の湯温泉を経て、17日帰郷。この行の記録に、トガクシショウマ・シロウマアサツキ・ウルップソウ・カライトソウ・オオサクラソウなど加わり、学術研究のための白馬登山の最初とされている。「小学国語読本」の「岡田先生の白馬岳の話」は、この時の岡田（当時北安曇郡七貴小学校訓導）の紀行文を河野が文部省の知人に推せんしたものであるという。

1900（明治33年）35才、長野高等女学校教諭。翌年より長野県師範学校教授嘱託も兼任。

1902（明治35年）37才、下伊那高等女学校教諭、翌年同校校長。

1905（明治38年）40才、松本女子師範学校創立に当り、校長矢沢米三郎に招かれ、同校教頭となる。

1907（明治40年）42才、7月27日より8月2日まで、八ヶ岳で高山植物の研究会を実施。会長矢沢米三郎、講師牧野富太郎で、その実施運営の中心となり、全国の研究者を集めて盛大に行なわれた。県内では八木貞助・千野光茂らも参加。この行では、千野がクロノサヒョウタンボクを日本で最初に採集している。

1909（明治42年）44才、木曾駒ヶ岳登山。ヒメウスユキソウ・ハハコヨモギ・ハクセンナズナ・ミヤマグルマなどが記録されている。

1913（大正2年）48才、上伊那農学校長。この年、南アルプス荒川岳でスルガヒョウタンボク（エンノウタンボク）を発見。

1916（大正5年）51才、長野高等女学校長。

1922（大正11年）57才、諏訪高等女学校長。

1931（昭和6年）退職。

氏はこの間、信濃博物学会、信濃山岳会の創立に参画し、また長野県史蹟名勝天然記念物調査委員として、大正12年より昭和14年（1939）に逝去するまで長野県の天然記念物の調査報告を多数書いている。更に高山植物の栽培、ロックガーデンの造園に詳しく、その造成にかかるものが各所に残された。

氏の著述にかかる主なものには、次のようなものがある。

高山植物（1913年）岩波書店発行。

高山植物の研究（1917年）岩波書店発行。

日本アルプス登山案内（1917年）矢沢米三郎と共著。岩波書店発行。

信濃郷土叢書 日本アルプス（1927）信濃郷土文化普及会発行。

高山研究（1927年）岩波書店発行。

日本高山植物図説（1931年）朋文堂発行。これには328種の高山植物の原色図版がのせられ、わが国の原色植物図鑑の先駆をなすものであった。

高山植物の培養（1934年）朋文堂発行。

この外、「信濃博物学雑誌」・「信濃山岳会報」・「信濃教育」・「山岳」などに論文を多数発表している。

氏の発見、新産地確認などの植物には、次のようなものがある。

ウルップソウは、前記のように1899年白馬岳で確認されているが、カムチャッカ・アラスカなどにも分布するもので、日本内地での最初の確認である。

シロウマアサツキもシベリアから分布するもので、白馬岳は、その分布の南限のものであるという。

ヒメセンブリを1903年南アルプス荒川岳で確認。これも日本での確認の最初である。

ヒナリンドウを1904年八ヶ岳で、矢沢米三郎と共に発見。

牧野富太郎によって *Gentiana pseudo-humilis* Makino と名付けられたが、その後、これは中央アジアなどにある *G. aquatica* L. の隔離分布であるとされている。

ミヤマイチゴツナギも同じ年、早川隆助・矢沢米三郎と共に発見。

ハハコヨモギ 1909年、木曾駒ヶ岳で確認、日本での最初の確認。

コメヒョウタンボク 1912年、南アルプス荒川岳で確認。牧野富太郎によって *Lonicera konoi* Makino と命名されたが、その後の研究によって現在は *L. linderifolia* Maxim. var. *konoi* Okuyama と改められ、ヤブヒョウタンボクの変種とされている。

スルガヒョウタンボク 1913年南アルプス岳の静

岡側の中腹で発見。牧野富太郎によって *Lonicera watanabeana* Makino と命名されたが、その後の研究によって、*L. glehni* Fr. Schm. の学名を持つエゾヒョウタンボクと同じものであるということになっている。なおこの牧野命名の *watanabeana* は、河野がこの植物を諏訪出身の渡辺子爵に贈呈した事実に基づいたものである。

トガクシギク 1916年戸隠山で発見。1921年牧野富太郎が *Chrysanthemum konoanum* Makino と命名しているが、その後の研究によって、これはイワインチンとリュウノウギクとの雑種であるとされている。

河野のこのような高山（植物）研究に多大な影響と援助とを与えたと思われるものに、すぐ上の実兄河野常吉（1862～1930）がある。兄は中央気象台に勤務していて、明治24年（1891）には御岳の山頂および山麓に40余日も滞在して、気象観測に従事し、従来信仰の対象と見られた高山を、すでに学術研究していた人である。

雑誌「信濃教育」昭和14年9月号

杉本順一 長野県植物総目録

横内斎 長野県の植物

長野県文化財保護協会 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書 1～6巻

【植物ニュース】24. トラキチラン *Epipogium aphyllum* (F. W. Schm.) Swartz

本種は温帯から亜寒帯に分布するものであるが、まれにしか見られない。今までに、日光、尾瀬、秩父、八ヶ岳、南アルプス北部で確認されている。昨年の夏、筑摩山脈西側の針葉樹林のやや暗い谷でみることができた。この地は、今までに確認された区域から北西にやや離れている。同定していただいた信大清水建美博士に厚く御礼申し上げます。

（楯 誠治）

25. ゴウシュウアリタソウ *Chenopodium pumilio* R. Br.

松本市石芝路辺で、1977年8月3日採取。アカザ科1年草、アリタソウに似て小形、特異の臭気があり、少しく地に伏す。オーストラリア原産。長野県新記録。（浅川富雄）

26. キバナタカサブロウ *Guizotia abyssinica* (L. f.) Cass.

松本市南松本の路辺やぶ地で、1977年9月23日採取。キク科1年草で、草丈は1m余りもある。

花はクイモより小さい。黄色の舌状花は美しい。葉柄のない楕円形の葉を対生しているのが目立つ。長野県新記録。（浅川富雄）

27. メマツヨイグサ *Oenothera biennis* L.

今までアレチマツヨイグサの和名で扱ってきたものを原色日本帰化植物図鑑に従ってこの際区別したい。これはアレチマツヨイグサに比し次のような相違点がある。

	メマツヨイグサ	アレチマツヨイグサ
茎	紅色を帯び毛著しい 大きい毛の基部は隆起し 紅色のこぶになる	並緑で毛は多くない 隆起しない
葉	鋸歯浅い 上向きに立つ	やや深い 特に下部の葉は垂れる
花	花卉の間にすき間なし 橙黄色 花卉の先の中央のみくぼむ	すき間がある 浅黄色 浅いくぼみが2,3並ぶ

両者の県内の分布は再検の要がある。（浅川富雄）